

走り出攷

——ハシルの意義に関わって——

垣 見 修 司

はじめに

日本書紀歌謡七七に「こもりくの 泊瀬の山は 出で立ちのよろしき山 走り出の よろしき山の」と詠み込まれる「走り出」の語は、万葉集卷十三・三三三二歌の類句「走り出の 宜しき山の 出で立ちの くはしき山ぞ」にも見え、柿本人麻呂の泣血哀慟歌（卷二・二二〇）にも「走り出の 堤に立てる 槻の木」として現れる。かつてその語義は「家から走り出て見るところの」というように解され、山や堤を修飾するとされてきたが、井手至氏^①によって、垂直方向に聳える山の形状をいう「出で立ち」に対して、「走り出」は水平方向に突き出た形状をさした表現であるとの見解が示されて以来、「横に長く突き出た」意と説かれることも多くなっている。ただしこうした理解は、「走り出」を連山、つまり山々の横

の連なりとして捉えているようで、現在、忍坂山に比定される外鎌山が独立した形状を持つこととは相容れない。一方、「走り出」を谷川の走り出る景観をいったものとする土淵知之氏「はしり（わしり）で」考^②の見解もあるが、山讃めの対句に用いられる語であることを考慮すると、「走り出」を水の流れと解することには不安が残る。とはいえ、「横に長く突き出た」意と解するにもハシルの語義理解が十分ではないように思われる。本論においてはハシルの語が持つ意義を考え直すことで、あらためて「走り出」を山が裾野を長く広げる様子を表現した語として捉えたい。なお、「はしり」と「わしり」については同義と見なして、今は音の違いは問わない。

一 「はしる」主体

上代語「走り出」は紀歌謡にあらわれる。

六年の春二月の壬子の朔にして乙卯に、天皇、泊瀬の小野に遊でます。山野の体勢を観して、慨然きて感を興したまひ、歌して曰はく、

こもりくの 泊瀬の山は 出で立ちの よろしき山 走り
出の【和斯里底能】 よろしき山の こもりくの 泊瀬の

山は あやにうら麗し あやにうら麗し(紀七七)

とのたまふ。是に小野を名けて、道小野と曰ふ。(雄略紀)

雄略天皇が春の泊瀬の小野で、山野の体勢をみて感興をもよおして詠んだ歌である。対句部分に泊瀬の山の「出で立ち」と「走り出」が「よろし」と讀えられており、いわゆる山讚めの歌と見てよい。^③ただし「泊瀬の小野」から眺められる「泊瀬の山」が具体的にどの山を指すかは明らかでない。

一方、万葉集卷十三に収められる類歌も「走り出」の語を持つ。

こもりくの 泊瀬の山 青旗の 忍坂の山は 走り出の【走出
之】宜しき山の 出で立ちの くはしき山ぞ あたらしき山

の 荒れまく惜しも(卷十三・三三三二)

「泊瀬の山」の一つである「忍坂の山」を挙げ、対句「走り出の

宜しき山の 出で立ちの くはしき山ぞ」と山を讚めながらも、結句にはその山が荒れ果てていくのを惜しむ。山はすなわち遺愛の山であり、手入れされ生活の場ともなっていたであろう山に、人が立ち入ることもなくなり荒れていくと歌うことでその人の不在を嘆く。そして「走り出」は柿本人麻呂の泣血哀慟歌にも見出される。

うつせみと 思ひし時にへに云ふ、「うつせみと思ひし」
取り持ちて 我が二人見し 走り出の【趁出之】 堤に立てる
榎の木のことちごちの枝の 春の葉の 繁きごとく 思へり
し 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世の中を 背
きし得ねば…(卷二・二二〇)

「走り出の 堤」に立つ榎の木の枝を手に取りつつ、生前の妻と二人で眺めたことを歌い、その枝に葉が茂るように生命力にあふれていた妻を偲んでいる。

「走り出」は以上三例しか見出されないため、語の理解には揺れが生じてきた。注釈書の説明には、走る主体を人と解するか、山そのものと解するかの違いがある。『稷威言別』は、

されば此山は、朝倉宮に眞向ひて、常に立馳にも、出て見給ふ地なりければ、出立とも、走出とも詔ふなり。(紀七七)

と説く。「泊瀬の山」を雄略天皇のいます朝倉の宮の眞向かいにあるものと考え、天皇がたち走り出て山に向かい合う場所を「出で立

ち」とも「わしり出」とも言うのだとして、「出で立ち」も「走り出」も雄略天皇を主体と捉える。人が家から走り出たすぐの場所という点は『考』も二二〇歌について、

越出之。(或本、出立之、これも同く門ちかき所をいふ、)

と説いており、土橋寛氏の『古代歌謡全注釈 日本書紀編』もまた、山は家の中からも見えるはずなのに、なぜ「出で立ちの」「走り出の」というのかとの疑問があるが、古代の家は窓が少なく、外に出なければ見えないという事情があったのではないか。そうでなければ「出で立ちて見る」歌が多い事実を説明できないように思う。

と述べて、「出で立ち」と「走り出」が同じ意味であるとの理解を踏襲する。ただし、家屋に窓が少ないとしてもたとえ戸口から山が見られないわけではなからうし、家から走って出る必然性についても説かれない。「走り出」の主体を人とするこれらの説は、最近では『全歌講義』が二二〇歌について採用している。

一方、山そのものをはしる主体と捉える説として現在もっとも多く支持されるのは「走り出」を山の横方向の広がりとする立場である。荒木田久老は『日本紀歌解』（紀七七）に、

わしりでは、山の引はへたるをいひ、出立とは、山の立登りたるをいふ言にて、ともに山の成出たる形をいふ言と知べし、

走り出放

と述べて、「走り出」を「引はへたる」つまり横方向の広がり、「出で立ち」を「立ち登りたる」縦方向の表現とする。

さらに明確に横方向という点を推し進めて、山の連なり、連山としての広がりといったものと解するのが『考』の三三三三歌についての注である。

走、出之。宜山之。(此言右に引たる紀に、泊瀬一つをのたまひしを、こ、は二山のさまを分ちいへり、然ればはつせの山は、山の尾前へ廻りて穴磯山まで引つゞけるを走出といひ、忍坂は山立のよろしきをいふにやあらん、しか見ても一人をいふに嫌なし。)

三三三三歌について「泊瀬の山」と「忍坂の山」を別の山と解して、泊瀬川の北を東西に延びて穴師山まで廻る尾根筋を「初瀬の山」と捉えた上でそれを「走り出」と表現し、「出で立ち」は泊瀬川南の山を「忍坂の山」と見て、その独立した様子を「出で立ち」と表現したと説いている。紀七七の例と異なる意に解するのは歌の細かい相違を踏まえたからかもしれないが、三三三三歌が「こもりくの泊瀬の山は、走り出の宜しき山ぞ、青旗の忍坂の山は、出で立ちのくはしき山ぞ」というように二つの山が対句で並称されても

本文では「隠来之 長谷之山 青幡之 忍坂山者」とあつて対句前

項に助詞「は」は表記されず、歌全体も「隠来之 長谷之山 青嶠之 忍坂山者 走出之 宜山之 出立之 妙山叙 惜山之 荒巻惜毛」とほぼ助詞が表記されるため訓み添えも考えにくい。したがって「こもりくの泊瀬の山」と「青旗の忍坂の山」は言い換えの並列表現あるいは泊瀬の山々から忍坂の山を択一した表現で「走り出」、「出で立ち」は一つの山に対する表現と見るべきであろう。

万葉集の注釈書では『全註釈』(二二〇)が、

ハシリデは、山の姿の走り出たようにあるということ、イデと述べる。山の姿が走り出たようにあるという意味が明確でないが、横方向の広がりとする考え方は後述の井手至氏によって支持されたこともあって、多くの注釈書の従うところとなった。『澤瀉注釈』

が卷二の例については人主体説を採りながらその後の卷十三では山主体説に従ったのもやはり井手氏の論に拠っている。近年では『新大系』が『青森県五戸語彙』に「ハシリ。峰筋がうねうねと続いて何里も下方へ延びてその突端が川目、沢目になっている地形名」とあることを引いて、この説の補強を図っており、「出で立ちの」を「走り出の」に対して、これは山の高いさまを言う」とする点から「走り出」が山の横方向についての描写と理解していることがわかる。

さて、「走り出」について山の横方向の広がりという見方に対し縦方向の広がりとする説も見られる。

和斯里底能【ワセリソコノ】越出也。言奇巖佐石峙立也。【(『釈日本紀』)】

これを引く『日本書紀(歌)全注釈』には「こつこつとそばだち今にも動き出しそうなありさま。」と説かれる。ただし現在の比定地である外鎌山は「奇巖佐石峙立」と言えるほどに険しい様子は見られない。

このように現在人は人がはしる説と山(地形)がはしる説が並び行われているが、「出で立ちの よろしき山 走り出の よろしき山」や「走り出の 宜しき山の 出で立ちの くはしき山ぞ」と表現した際に、人が出で立つて見るとよいか人が家から走り出たときに眺めが良いというように山を見る側の状況を限定しなくてはならない人主体説は無理があると言わざるを得ない。

他方、「出で立ち」の語は動詞形「出で立つ」の例が多い。

…ひさかたの 天の川原に 出で立ちて みそぎてましを…

(卷三・四二〇)

月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をせせし行かまくを欲り

(卷四・七三六)

玉梓の道に出で立ち別れ来し日より思ふに忘る時なし(卷十

二・三三三九)

ほとんどが、人が門や道といった場所に出で立って人を待ったり、夕占を問ふたりするための動作を表すが、高橋虫麻呂の富士の山を詠む歌には、

なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で立てる 富士の高嶺は…(巻三・三一九)

とあり、山の姿を「出で立てる(出立有)」と表現している。時代別もこの例を引いて「山や樹木がまっすぐにつき立っているさまをいう」と解しており、人以外にも用いる表現と見て良い。したがって動かない山の竹まいを「出で立ち」と見ることは領けるにしても、静止した山の様子がなぜ「走り出」と表現されるのか。

なお「走り出」と「出で立ち」の関係についてはもう一つ興味深い例がある。泣血哀慟歌二一〇歌の異伝である二二三歌には、

うつそみと 思ひし時に 携はり 我が二人見し 出で立ちの 百足る楓の木 こちごちに 枝させるごと 春の葉の 繁きがごとく…

とあり、本伝では「走り出の」が現れる五句目に対応する形で、異伝に「出で立ちの」が詠みこまれる。この対応は人麻呂が紀七七か三三三二歌のような対句表現を踏まえて作歌したことを示すものと思われる。とくに挽歌という点で三三三二歌の表現を踏まえた可能性はあろう。ただし二二三歌では、「出で立ちの」は「百足る楓の

木」を修飾すると見られ、一本の木が佇立する縦方向の様態を表しているのに対して、本伝では「走り出の」は「堤」に係る。池の堤などで水を堰き止めるために十分な高さで作られる例はあるにしても、二二三歌の堤にそれとわかる描写はなく、基本的には堤の横方向の様態を表現したものと考えて良いだろう。

「出で立つ」は万葉集には動詞、連用形名詞をあわせて三十四例を数える(巻九・一六七四「出立の」は地名と見なし除く)。基本的には、先述のように門や道、ほかに庭・河原・瀬・海辺などいずれかの場所に向いていつて佇む様子を表す例が過半を占める。また

なつきにし奈良の都の荒れ行けば出で立つごとくに嘆きし増さる(巻六・一〇四九)

高円の秋野の上の朝霧に妻呼ぶ雄鹿出で立つらむか(巻二十・四三一九)

の例は「(場所)に」という形ではないものの「奈良の都」、「高円の秋野」と出で立つ場所が明らかである。場所が明示されないものは、

隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひぐらし(巻八・一四七九)

出で立たむ力をなみと隠り居て君に恋ふるに心どもなし(巻十

七・三九七二)

…群鳥の 出で立ちかてに 滞り 顧みしつ…(巻二十・四三九八)

今日よりは顧みなくて大君の醜のみ楯と出で立つ我は(巻二

十・四三七三)

の前二例のように家から外出する意か、後二例のように家ないし拠点となる場所から出発する意で用いられる。つまり「出で立つ」は人や鹿、群鳥などの主体がある場所に臨む行動を表しても出で立つた場所そのものをさす例は見られない。二二三歌の「出で立ちの百足る槻の木」と三三三二歌「出で立ちのくはしき山ぞ」の場合も「出で立ちの」は槻の木と山をそれぞれ修飾すると解すべきであろう。その場合、「出で立ち」と「くはし」の主述関係は明確だが、

「出で立ちの百足る槻の木」については「出で立ちの」がどこに係ると考えれば良いか。本文「出立百足槻木」には異伝があり、「出立」は旧訓では「イデタテル」と訓まれる。また「足」の字は寛永版本では「兄」となっており、「モ、エツキノキ」の訓がある。しかし金沢本、類聚古集、廣瀬本で「足」の字が確認できるため、記九九の

…新嘗屋に 生ひ立てる 百足る(毛々陀流) 槻が枝は…

の例に準じて「モモダル」と訓じるのが良い。モモダルは「百足

る」の字のとおり「多くのものが満ち足りている(時代別)」意で、多くの枝を伸ばす槻(ケヤキ)の木の性質を讀えた表現である。基本的にはモモエツキノキ(百枝槻の木)と訓じたところで大差ないようにも見えるが、槻の木の出で立つ姿が豊かである(百足る)という主述関係においても、「出で立ちの」に続くのはモモダルがふさわしい。

二 「はしる」の語義(一)

さて井手至氏の論「いはばしる」^⑪はハシルの語の意味を考察し、山を主体とする説の可能性を広げた点で画期をなすものであった。

井手氏はハシルを含む「石走る」、「走井」、「走り出」を総括的に論じる視点から、まずハシルの語について

「はしる」とは、泉の進ほむるように湧き立つさまや、谷川の水しぶきをあげて勢いよく流れるさまを表現したものであると推定せられるのである。

と理解し、

命を幸く良けむと石走る【石流】垂水の水をむすびて飲みつ

(巻七・一一四二)

石走る【石激】垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけ

るかも(志貴皇子、巻八・一四一八)

石走る【石走】垂水の水のはしきやし君に恋ふらく我が心から

(巻十一・三〇二五)

石走る【伊波婆之流】滝もどろに鳴く蟬の声をし聞けば都し

思ほゆ(大石養麻呂、巻十五・三六一七)

等の「いはばしる」の語を、「若に水がはげしくぶつかりしぶきの飛び散るさまをいったもの」と推測する。こうして、

この小川霧を結べる激ち行く走井の上に【八信井上尔】言挙げ

せねども(巻七・一一二三)

落ち激つ走井水の【走井水之】清くあればおきては我は行きか

てぬかも(巻七・一一二七)

に歌われる「走り井」の語も勢いよく湧出する泉と理解する。

しかし「走り出」の語については垂水や井など水に関わる表現が見られないこともあって、承德本古謡集の「さやの中山」の歌と英語の run の例文をあげて、

ハシリデが、山勢そのものに關する表現の一部であり、垂直方向に聳える山の形状についていつたイデタチに對して、水平方向に突き出た山の形状を指していつたものである

と結論つけている。

井手氏が参照した承德本古謡集の例は、

甲斐が嶺のさよも見しよけれなく與古者之利世留さやの中山

(風俗歌、甲斐)

というものである。¹²⁾「さやの中山」は「さよの中山」とも言われる

東海道三大難所の一つで中山峠越えを指すと考えられている。「横走りせる」は大系『古代歌謡集』が底本とした楽章類語鈔や神宮文庫本では「よこほり立てる【与古保利太天流】」となっており、古今集の一〇九七歌に見える類歌では「横ほり臥せる」とある。「横ほる」は山などが「横たわる」状態を意味すると見られ、¹³⁾その場合中山峠越えの長い道のりも考えると山裾の広がりというよりもむしろ連山あるいは山塊の連なりをいうものと見られる。また例として挙げられた英語の例文は、

The run of the mountains is northwest. (山勢は北西に趨

ている、の意)

で山勢が北西に延びていることを表現するとしており、やはり尾根づたいに延びた連山について run と表現したものと思われる。つまりこの二つの例は、山裾の広がりというよりもむしろ山の尾根の連なりを表したものであろう。現在においても「道が東西南方向に走っている」や「山の稜線が南北方向に走る」という表現が可能である。

それゆえ井手氏は三三三三一歌の「走り出のよろしき山」については、まさしく「考」が「はつせの山は、山の尾前へ廻りて穴磯山ま

で引つゞける」と捉えて泊瀬北方の山並みを言ったものと考えたように連山の様子を意識しているようである。明確には述べていないが、おそらく泊瀬川が流れる長い谷筋を形成する南北またはそのいづれかの山並を意識したものとと思われる。しかし、三三三三歌では、忍坂山から水平方向に山並が延びているとすると、「出で立ち」を同じ忍坂山の垂直方向の山容を讀める表現と見ることとは相容れないであろう。連山の中の一つの山は高さが埋没してしまうため、忍坂山を独立峰として捉えてこそ、縦方向と横方向の対句は活きると思う。『考』が三三三三歌に関しては「こゝは二山のさまを分ちいへり」と解するのも「走り出」を山の連なりと見る一方で、「出で立ち」は一つの山の姿と捉えたからであろう。なお『考』は紀七七七については「泊瀬一つをのたまひしを」と述べており、泊瀬一帯の山々の描写と見ているようである。

忍坂山は桜井市忍坂の東方に位置する外鎌山（二九二m）に比定される。北方の泊瀬川（大和川）の北側や西方の奈良盆地から眺めた場合、外鎌山は小富士状の独立した山に見える。西側の桜井市赤尾には忍坂山口坐神社、南側には舒明天皇陵である忍坂内陵に加えて鏡女王、大伴皇女の墓などもあり、三三三三歌が挽歌である点からも外鎌山を忍坂山に比定することはふさわしく思われる。

忍坂山には隣接する山々はあるものの、谷をはさむため水平方向

に連なる山並が続くとは言いがたく、忍坂山が外鎌山とするならば、対句が一つの山の「出で立ち」と「走り出」を讀めたものと見るべきであろう。だとすると、「走り出」は忍坂山が末広がり延びたその山裾を捉えた表現ということになる。はたして山の裾野について「走り出」と表現することが可能なのだろうか。裾野があるからといって山が走り出すように見えるわけではないため、『全註釈』の「山の姿の走り出たようにある」といった比喩的な説明も曖昧で、理解には揺れが生じているものと思われる。

ただ説が定まらない中で別の見方が試みられなかったわけではない。酒井貞三氏は、

次に「走り出の」「出で立ちの」を「人」がではなく対象の姿として、而も「山」がではなく

（川の）走り出る（姿）の宜しき山。（樹木の）出で立てる（姿）の妙しき山。

としてはどうであろう。又、さればこそ一方は宜しき他方は妙しきと形容されているのではあるまいか。

として「走り出の」の主体を「人」や「山」ではなく「川」と推測する^⑭。酒井氏は結局その見方を採らなかつたが、その後、土淵知之氏によってほぼ同様の見方が示された。

私は、谷川の「走り出」る景観が「宜しき山」で、樹林の「出

で立」つ姿が「妙しき山」と見たい。つまり「水清くして樹木麗し」とるのである。

土淵氏は「走り出」を「谷川の「走り出」る景觀」、「谷川の水の流れ落ちる景觀」と捉え、それによって「走り出」の例も「谷川の水しぶきをあげて勢いよく流れるさまを表現したもの」を表すという、井手氏が明らかにした「走る」の語の用法において理解することが可能になると指摘する。¹⁶⁾

「走り出」が水の激しい流れを表す「はしる」の一つの例として用いられたと考える土淵氏の見方であれば、たしかに紀七七、二二三歌、三三三二歌いずれも統一的に理解することができそうではある。人麻呂の「走り出の堤」もそのような流れの堤防をいつたものということになる。

しかし「走り出のよろしき山」が水の流れ出る様子を讀えた表現であつた場合、「出で立ち」が縦方向、「走り出」が横方向の、どちらも山を讀えた対句ではなくなってしまう。山から出る流れとは言つても、川の流れを讀えることになるため山そのものを讀えているとは言えず、山讀めの表現としては不審が残る。やはり対句のいづれもが山容の讀美と見るべきではないか。とはいへ、忍坂山が独立した一つの山と考えられる以上、連山の様子を讀えたと表現したり、「山の姿の走り出たようにある」とする説明には従えない。

その場合、ハシルの意をどのように捉えるかが問題となろう。

三 「はしる」の語義(二)

ハシルには井手氏が指摘したように、水が勢いよく流れる意を表す例が多く、その点で「走り出」もそうした意義において理解することは魅力的にも感じられるが、「出で立ち」との対偶を考慮すると山讀めとしてはあくまでも山の形そのものを讀えた表現と思われる。井手氏は「はしり出」は、むしろ、横(水平方向)に低く横たわつた山の姿についての表現であると見るのが穏やかな見解といふことになる。と述べて「走り出」を水平方向の山の連なりとするが、むしろ独立峰としての山裾の広がりを「走り出」と解する余地はないか。そうした想定を行う際に参照したいのがハシルの次のような用例である。

すべもなく苦しくあれば出波之利去なと思へど此らに障りぬ
(卷五・八九九)

山上憶良の「老いにたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌」の反歌で、年老いて病に苦しみながらも子どもが気になるために逃げ出してしまふこともできないと歌う。「出で走り去なな」にはままならない現実から何もかも放り出して逃げ出したい思いが込められており、ハシルにはあらぬ先へと出ていって姿をく

らましたいという心情が認められる。ハシルが逃げる、逃亡するという意味を持つことは中古以降の用例に明確に認められており、類聚名義抄には逃げる意を持つ「連・逃」の字に「ニグ」とともに「ハシル」の訓が記される。上代において逃げる意を認める例は八九九歌しかないが、ハシルが持つ、逸脱して別の領域に進むというニュアンスは他の例にも共通して見られるものである。

穴を掘りて、立て随ら埋みしかば、腰を埋む時に至りて、両つの目、走り抜けて、死にき。(安康記)

白日子王が腰まで埋められた段階で、両目が飛び出て死んだ様子が「両目、走抜」と記される。ハシルの訓義において「走」の字が用いられていると見て良く、眼球が眼窩から飛び出るのは、あるべき場所から別の空間に出て行くことと言える。結局、「イハバシル」や「ハシリキ」など、水が勢いよく飛び散る意を表すハシルも飛沫が先の空間に飛んでいくことであり、ハシルは人や物体が別の方向へと進んでいく様子を表すのである。

ハシルにはこのように単に何かが早く進むことを言うだけでなく、あるべき場所から新たな場所に逸脱することをも表す。新撰字鏡には、

註^⑧ (九王反。詫也。伊乃留。久留比天毛乃伊不。又口波之留。)

註(詫) (九王反。禱也。久知波志留。又大波已止。又久留比天毛乃云。)

「クチバシル」の訓を持つ二つの字には「クルヒテモノイフ(狂ひて物言ふ)」の訓もあり、言うことがはばかられたり言う必要のない内容をつい言ってしまったたりすることをクチバシルというのである。ここにも逸脱の要素を認めて良い。さらに物体が異なる空間・領域を進んで行く乃至切り拓く場合にもハシルという表現が用いられる。

天雲に近く走りて鳴る神の見れば恐し見ねば悲しも(巻七・一三六九)

雷を視覚的に捉えているから稲妻の閃光をハシルと表現するのである。稲妻は空間に亀裂を生じるように、伸長する先端が空間を進んでいくものと見ることが出来る。ハシルは勢いをもってある場所から別の場所へと逸脱し、その結果、ハシル物体の先端や到り着く先の状態までをも想起させる表現となっている。

爾くして、其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、石析神。(神代記)

伊耶那岐命が十拳の剣で、迦具土神の頸を斬って飛び散る血が湯津石村に付着する場面においても、ハシルは血が飛び散った先の様子が描かれている。

難波津に御船泊てぬと聞こえ来ば紐解き放けて立ち走りせむ
(巻五・八九六)

玉櫛笥 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たな
びきぬれば 立ち走り 叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつ
つ…(巻九・一七四〇)

八九六歌は山上憶良の「好去好來の歌」の反歌で、遣唐使が難波津に帰着した報せを聞いて迎えに行こうとする様子が歌われており、立ち走るその先には帰港した遣唐使船の威容が思われる。一七四〇歌は浦島子の最期を描く場面で、玉櫛笥から漂い出て常世辺にたなびいていく白雲を追い求めて叫び、取り戻そうと袖を振ってもそれが叶わない様子が描かれているのであろう。この「立ち走り」については「ここは立ったまま上下に跳ねることをいう。〔釈注〕」と説かれ、「踊り上って。〔新大系〕」と解されることがあるが、「立ち走り 叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつ」について「以下四句失つたものを取り戻そうとする動作を表す。〔和歌大系〕」とする理解もあり、

走り追いかけて大声をあげ袖を振って。「立ち」は接頭語。「走り」は常世辺の方向に白雲がたなびいて行くのを追いかける動作である。立つて上下にとびはねるのではない。〔全注〕
とするのが明解である。人が立ち走る二例においても、今ある場所

から目的となる場所に向かっていく場面にハシルが用いられている。現代語においても、いわゆる先駆けとなるものを「はしり」と言う点に、ある地点からあらたな場所に進出するその先に重点がある意義を認めることができる。

ハシルに認められるこうした含意を踏まえると山の裾野を「走り出」と呼ぶことも説明できるのではないか。山の稜線が長く緩やかに低下していく部分を、山そのものがその他の空間や土地に伸長・伸展していく様子として捉えて「走り出」と言ったものと思われる。山裾であれば、外側に突き出た部分という点で「走り出」の語に「出」があることも納得しやすい。井手氏の見解とは横方向という点で同じだが、低い山の連なりではなく、長く緩やかに伸びている山の裾野の美しさを讃えたものと見たい。その方が忍坂山と考えられる外鎌山の山容にも合致する。『新編全集日本書紀』が説く「ワシリデは山の裾が横に勢いよくせり出しているさまをいう。」との解し方は山裾の伸びを指しているとも見られるが、地形に勢いがあるとする説明は不十分であろう。紀七七の「走り出」も「泊瀬の山」がどの山かは特定できないが、むしろ泊瀬一帯の山の裾野を讃えた表現と思われる。人麻呂が歌った「走り出の堤」も山から延びた谷筋の地形を利用して造られた溜池などの堤防部分を呼んだものと解するのが良いだろう。傾斜地のその先に伸びる堤であったと考

えられる。

おわりに

ハシルは「出で走り去る」のように、ある場所から逸脱し別の場所に先んじて進むことを意味する。そして逸脱に加えて、その先の有り様に重点が置かれ、「立ち走り」のようにハシル主体が目的乃至目標物に向かって行こうとする意志が感じられたり、「湯津石村に走り就きて」のようにハシルことで至り着く先の様子が描写されたりもする。それゆえ「走り出」は裾野が山体から外に向かって長く伸びている流麗な美しさを讃える表現として、山の立ち上がった縦方向の讚美である「出で立ち」と対になるものと思われる。従来の「走り出」の理解は水平方向に伸びる状態を意味する点から説明されてきたが、ハシルに物や人が今ある場所、あるべき場所から逸脱し、その先に進展・伸長していく様子を表す意義があることから、山裾の部分が「走り出」と表現されたと考えるべきであろう。「走り出」は山が走り出すような地形と言うわけでなく、山の裾野が新たな空間領域に進み伸びている様子を意味しているのである。

注

① 井手至氏「いはばしる」(『遊文録 萬葉篇』二和泉書院、平成二年

一〇月、初出「萬葉語イハバシル・ハシリキ・ハシリデ」昭和三四年七月)。

② 『國學院雜誌』八三卷一号、昭和五七年一月。

③ 『攷證』は「はとわは、ことに近き音なれば、古へより、わしりとも、はしりとも、いひしならんと思はるれば、眞淵の、はしりとよまれしも誤りにはあらねど、雄略紀の御歌によりて、今はわしりとよめるなり」と述べる。

④ 三三三二の理解については内田賢徳氏「挽歌と山讚め歌」(『万葉の知』塙書房、平成四年七月)参照。

⑤ 同様の理解は、『管見』⑬や『代匠記』(初稿本)②⑬、『記紀歌謡全註解』⑫などにみることができる。以下、⑫②⑬はそれぞれ紀歌謡七七、万葉集卷二・二二〇、卷十三・三三三二一についての説であることを示す。

⑥ 『攷證』②、『古義』②、『美夫君志』②、『井上新考』②、『山田講義』

②、『鴻巣全釈』②⑬、『総釈』②、『金子評釈』②、『窪田評釈』②、

『私注』②、『私注』⑬、『注釈』②、『全注』②、『全歌講義』②も同様。

但し、『古義』は紀七七については「山の自成出たる體勢を詔へるにて言はしけれど、意は別なり」とする。

⑦ 『古義』⑬、『略解』⑬、『窪田評釈』⑬、『記紀歌謡評釈』も同様。

⑧ 『古義』は「二卷に、越出之堤ワシリデノツミ、爾立有」とあるは、人の越出にて、今とは異れり」と述べる。「しか見ても」以下は、一人に対する挽歌に二山を詠み込んでも問題ないという意。

⑧ 山をハシル主体と見る説は、『全註釈』②⑬、『童蒙抄』⑬、『総釈』

⑬、『全書』⑬、『澤瀉注釈』⑬、『旺文社』⑬、『釈注』②⑬、『新編全集』⑫、『全注』⑬、『全解』②⑬。

⑨ 能田多代子氏、昭和三八年二月。

める動作。」と記す。

⑩ 記九九の「生ひ立てる 百足る」に合わせて「出で立てる」と訓む可能性もあるが、助動詞に相当する「有」の表記がないことと、「走り出」との関わりから「出で立ちの」と訓むのが優勢である。

⑪ 注①前掲論。

⑫ 本文は「加比加祢乃左余毛見之余介、礼奈久与古者之利世留左也乃加也未」〔陽明叢書国書篇第八輯 古楽古歌謡集〕思文閣出版、昭和五年九月。大系本『古代歌謡集』では「甲斐が嶺を さやにも見しかや 心なく 横ほり立てる さやの中山」とある。

⑬ 『日国第二版』は、「横に伏し広がる。山などが横たわる。」の意として『土左日記』の「東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」といふ」(承平五年二月一日)の例などを挙げる。大系本は甲斐の国の方言とする。

⑭ 酒井貞三氏「走り出の・出で立ちの」考〔『解釈』九卷五号、昭和三年五月）

⑮ 酒井氏は「結論として、「走り出の」「出で立ちの」は「人」が走り出で、出で立つのであり、語源的には、国見、歌垣に関する「村人」の行動の表現から出たのではないか。」と述べる。

⑯ なお井手氏は注①前掲初出論文を『遊文録』に収録する際、補注に土淵氏の説を紹介している。なお、酒井氏と土淵氏は「出で立ち」を樹木の出で立ちと捉えるが、「出で立てる 富士の高嶺は(三・三一九)」の例も考慮すれば山の出で立ちと解するのが良いであろう。

⑰ 逃げる意の用例として、『日国第二版』は源氏物語(紅葉賀)、『全訳全文古語辞典』は徒然草(二二一段)を掲出する。

⑱ 『經典釈文』(卷第十一、礼記音義之一)に「無誑(本或作証、同九況一反、欺也)」とあり、「証」は「誑」に通ずる。

⑲ 『釈注』にも先の引用に続けて「以下四句、失われたものを必死に求